

出身分野に着目した研究者のネットワーク分析

田中 恭平

近年、共同研究がさまざまな分野で実施され、その成果である共著論文の発表も盛んになってきている。共同研究は、複数の研究者間の協力関係の上に成り立つが、それに影響を及ぼす要因の一つとして、研究者の出身分野が挙げられる。研究者間で出身分野が異なる場合には、各人が異なる視点・技術・知識を持っていることによる影響が生じる。さらに、教育学などでは出身分野が分散していると考えられるため、その影響が特に顕著に表れると推測できる。

研究者の現時点での所属機関・専門分野に着目した研究や、研究者間の協力関係に着目した研究は多数存在する。しかし、研究者の出身分野に着目した研究は少なく、現在の所属分野などと関連付けて論じている研究はほとんどない。

そこで本研究では、出身分野が共同研究の実施にもたらす影響を明らかにすることを目指し、研究分野間の流動性や他分野との連携状況を把握する。教育学の4つの下位領域(教育工学・教育史学・歴史教育学・算数教育学)を対象とし、研究者の出身分野と共同研究の状況に関する特徴を比べる。

4領域のいずれかにおいて、2003年から2012年に学術論文を発表した研究者について、論文に関する情報をCiNiiから、所属分野に関する情報をReaD&Researchmapから収集した。それらの情報をもとに、研究者の所属分野をノードとした分野変遷ネットワーク、研究者をノードとした共著ネットワークを構築し、特徴を分析した。さらに共同研究において中心的な役割を果たす研究者の特徴を明らかにするために、共著者数の多い著者について、分野変遷状況を調査した。

分析から、次のことが明らかになった。

- 教育工学以外の領域では教育学出身者が多くの割合を占めていること
- 教育工学以外の領域では共著者数の多い著者の大半は教育学出身者であること
- 教育工学領域では他分野、特に工学・情報学分野からの参加者が多いこと
- 教育工学領域では他領域と比較して共著論文比率が高い傾向にあること。

教育工学領域と他領域では共著論文の生産状況や出身分野が大きく異なっている結果となった。教育工学に他領域からの参加者が多い要因としては、教育工学領域が比較的新しい領域であり、他領域からの参加が容易であることが考えられる。また、教育工学における共著論文比率が高い要因としては、参加者の多い工学分野の影響が推察される。

今後の課題としては、研究分野の変遷に差が生じる要因を詳細に検討すること、論文の引用状況といった論文自体の情報にも着目することが挙げられる。

(指導教員 芳鐘冬樹)